



こんにちは、工藤篤子です。
皆様いかがお過ごしでしょうか。

ハンブルグは、緑の中にすっぽり包まれた季節になりました。2車線の道路でさえ、向かい合わせの街路樹の枝がぶつかり合うので、どこを通っても、緑のトンネル。まるで森の中を散策しているようです。日差しが柔らかい時には、日に透かされた緑が、なんとも言えぬ美しさです。大きな栗の木は、藤の花を逆さに立てたように、白い花がまっさかり。家々の垣根はピンクやパールのロードーデンドロンの花々。どこを歩いても必ず聞こえる鳥の声と鐘の音。おまけに白夜の北欧に近いハンブルグは、夜の10時を回らないと暗くなりません。いつもは暗いドイツに、神様がくださった絶品のプレゼントです。

写真：ニコライ教会

聖書を読む会

いよいよ5月18日から、日本人の声楽の生徒Sさん、Kさん、そしてピアニストのTさんと、聖書の学びを始めました。これは、私が前回日本に帰国する前に約束していた学びです。テキストは日本の「聖書を読む会」の「基礎の学び」を使っています。学びに参加している三人のうち二人は、すでに興味津々で信仰雑誌を読み続けてきたので、質問しても的確に答えが返ってきます。今回は「神はどんな存在か」を知るために、創世記の1章を見てみました。「神様が全ての創造主じゃ、私達は敬服するしかないですよ。」とTさん。「そうなんです！」それにしても、聖書を読む会をリードしている私の方が多く学ばされているような気がします。

次回は3週間後になりますが、「神が存在するなら、なぜ世界はこのような状態なのか」を、創世記2?3章から見てゆきます。いよいよ罪のテーマです。この三人の救いを願うあまり、時々心がはやります。でも救いに導いてくださるのは主。ですから皆さんも共にどうぞSさん、Kさん、Tさんのためにお祈りください。よろしくお願いいたします。

ハンブルグ日本人教会のこと

5月19日、久しぶりにハンブルグ日本人教会へ行ってきました。私は賛美と証しをさせていただきました。久しぶりにお会いできた懐かしい方々、また最近ハンブルグに赴任されたご夫婦や音大受験生など初めてお会いする方々。

驚いたのは、1990年に初めてハンブルグで日本人家庭集会を始められた大西啓介兄が、ヨーロッパ出張のついでに礼拝に出席されていたことでした。うれしい出会いでした。

当時、ハンブルグに赴任していた大西兄と奥様は、日本人に重荷を抱いていたドイツ人のコニツァーご夫妻と出会い、1990年、大西家の居間にて、月に一度の家庭集会を始めました。当時、ハンブルグ外国人伝道協議会の議長をしていた私の教会の牧師、ダニエルは、コニツァー氏の友人でした。それで、ダニエルと私は、日本人伝道のために協力するようになりました。

毎回ではありませんでしたが、日本人の家庭集会にて、ダニエルがスペイン語でメッセージをし、私がそれを日本語に訳すのです。それまでドイツ人伝道のことしか頭になかった私に、同胞への救霊の願いが沸き上がったのはこの時でした。その後、私の片足は日本人への働きのためにどっぷり浸かるようになりました。家庭集会から教会に発足し、またしばらく無牧になった時には、聖書の学び会をリードさせていただいたこともありました。

そして91年、7年ぶりに初の帰国、ヨーロッパかぶれの浦島花子なる私は、富んだ日本人の、失われた精神性を目の当たりにして、涙が止まらなかったのを覚えています。ここは世紀末だ、と思ったのです。あのとき、「生きる本当の意味を探し求めるようになるために、神様、この国を揺さぶってください！ そうしないと富で傲慢になった日本人の心は気が付かないでしょうから。」と祈ったのを覚えています。

93年には、私はFGEC教会にて伝道師として奉仕するようになったので、日本人教会のお手伝いはほとんど出来なくなりましたが、そのうちハノーファーにも日本人集会ができ、ベルリンでも会が持たれるようになりました。

ハンブルグ日本人教会は、家庭集会以来、今年で12年目を迎えます。現在は、河村先生ご夫妻が、ベルリンからハンブルグのために毎週来てくださっています。大西家の一室の小さな家庭集会から始まった日本人教会、その陰にはコニツァーご夫妻の篤い祈りがあったのですが、このことについてはまた次回にお話しさせていただきます。皆さん、これからのハンブルグ日本人教会の祝福のために、どうぞお祈りください。

最近思ったことーといなしの祈り

ドイツに戻ってから一番嬉しいのが、ほとんどの朝、時間に追われないで主との交わりの時が持てていることです。みことばと共に、主の前でゆったりしていると、だんだんたくさんの知人の思いが心の中にわき上がってきました。そういえば、以前は祈りのノートに名前を書いて、毎日、家族、友人、知人ために祈っていたのに、最近はその祈りが途絶えていました。とりなしの祈りをしていなかったわけではないのですけれど、リストにある人々を毎日祈る時間がありませんでした。ですから、心に浮かんだ人と、当面の奉仕活動や、奉仕する教会のために祈ることで、もう心も時間も一杯、といった状態でした。今、主がその人々へ再び祈る時を与えてくださった、と思いました。そして、バジレア・シュリングの「祈りの石垣を築け」を開きました。

「神は祭司のような犠牲を捧げる魂を求めておられる。」

伝道という奉仕は、魂を捧げること。つまり、いのちを捧げることです。

余談になりますが、「伝道とは、いのちを捧げること」に関して、私は、大きな失敗を犯しています。それは未だに忘れることのできない悲しい出来事、悔恨です。

昔、ひょんなことから、ハンブルグの男娼売春地区での伝道に導かれた時期がありました。男娼たちのほとんどはきゃしゃな南米人で、女装か、性転換をした人たちです。多くの場合は男性だとは見分けがつかず、パスポートを偽造して入国し、傷害、殺害事件も頻繁です。彼らのほとんどは、家が貧しいので、実家に稼いだ一部を仕送りしています。

ある日、毎日詩篇の25章を読んでいるという女装男娼夫が、「もう売春をやめてイエス様に従う。けれどもペルーに帰るのにどうしてもあと一週間働かなくちゃならない。でもそれが終わったら、髪を切って、ペルーに帰り、男に戻る。」と約束したのです。私はそのとき、今日、イエス様に従うなら、もう売春などしてはいけない、と心の中で思ったのです。そして、ペルーに帰るお金は私が出してあげるから、売春はもうやめなさい、と言うべきでした。

実は、私には、彼の旅費代ぐらいのお金がありました。けれども無職の頃でしたら、一体このお金を彼にあげたら来月どうやって暮らすのか、という不安があったのです。ですから、私は何も言いませんでした。彼は重度のエイズにかかっていた。一週間後、エイズの薬が安価で手に入るスペインへ行く、バルセロナのある病院で働く口が見つかったから、そして1年たったらペルーに帰る、と言いました。けれども後でハンブルグの男娼仲間から、彼がまたもとの黙阿弥に戻ったことを聞きました。

仮に私が彼に旅費をあげていて、彼がペルーに戻ったとしても、もしかすると彼はまた男娼に戻っていたかもしれません。問題なのは、私の伝道の姿勢です。私は伝道のためにすべてを犠牲にしていませんでした。私が主に100パーセント従っていたなら、彼に旅費をあげても、主は私のその後の必要を満たしてくださることが分かっていたはず。あるいは主は違った方法を持って、彼を悪の道から救い出してくださったかもしれないのです。未だに詩篇の25篇を読むと、未だに彼のことを思い出します。

そして彼のことを思い出す度に、今でも心が痛むのです。私は伝道師にふさわしい者ではありませんでした。それどころか盲人が盲人を穴に導く闇の導き手だったのです。私はこの深い悔恨を通して、伝道とは命を捧げることであることを学びました。

「私は罪を犯しました。」

バジレア・シュリングは、**ダニエル書9章**の祈りを引用しています。国家の罪を自分の罪としてとになしの祈りを捧げたダニエル。私達クリスチャンも、友人、そして国家の罪を自分の罪として祈るべきなのです。皆さん、ダニエルの祈りと共に、日本のため、ヨーロッパのため、アメリカのため、そしてイスラエルのために、共に祈りませんか。イエス様は、私たちの罪となって死んでくださったのですから。

お祈りください

1. 6月1日、友人カロリーナの結婚式のため、スペインに行ってきます。新郎のアメリカ人のジミーは宣教師になるべく準備をしています。カロリーナの家族のほとんどはまだクリスチャンではありません。どうぞ、この結婚式が、ご家族や友人への主の証し場となりますように、そして主がカロリーナとジミーの結婚が大いに祝してくださり、二人が共に手を合わせて世界に主を宣べ伝えてゆきますように。

2. 6月2日、マドリッドの日本人集会にて証しをさせていただく予定です。この集会の祝福のためにお祈りください。また集会を導いてくださっている ハンナ・キビニエミさん（ご主人とふたりのお子さんがいらっしゃいます。）とご一家のためにもお祈りください。

戻りましたら、スペインの報告をさせていただきますね。
また紙面にてお目にかかれるのを楽しみにしております。

祝福を祈りつつ

工藤篤子